様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２８０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６４６３５０８

研究課題名（和文）地域住民と専門職による「看取りのケアの縁側づくり」の協働型アクションリサーチ

研究課題名（英文）Collaborative Action Research on Professionals and Community Residents Creating "Engawa" in End-of-life Care

研究代表者
大金　ひろみ（OGANE, HIROMI）

東京医療保健大学・医療保健学部・准教授

研究者番号：６０３０５６９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、地域での「看取りのケアの縁側づくり」のためのアクションリサーチを行った。在宅ケアに関わる専門職と素人の地域住民とによるワークショップでは、異なるコミュニティに属する人々が、その内外を往き来できる「場」である「縁側」の必要性が見いだされた。
　多職種による事例検討会では、ケアを行う中での各参加者の「思い」が、リエゾン精神専門看護師の助言によって参加者が共有できるケアの根拠として論理的に整理された。このことから、この事例検討会が「縁側」を往来する専門職の実践知を高める機会として有用である可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究のアクションリサーチ手法は、ワークショップ参加者の思いにもとづくディスカッションから得られたラーニングを共有するため、専門職と素人の地域住民とのディスカッションで起こりやすい知識の差による課題を生じず、コンセプトを見いだせると考えられる。また、在宅ケアの多職種の実践の振り返りや対人援助の技術向上のため、地域においてリエゾン精神看護師の活用が有用であると示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study carried out action research to create “engawa” (a boundaryless place of communication) in end-of-life care in communities. Workshops by ordinary community residents and professionals who are involved in at-home care uncovered the need for “engawa,” a place where people belonging to different communities can move in and out of those communities.
　With guidance from psychiatric liaison nurses (LPN-CNS), in case conferences involving persons from different professions the ideas of each participant engaged in care were logically organized as foundations of care that the participants were able to share. This suggested the possibility that such case conferences are useful opportunities to boost practical knowledge of professionals who come and go to “engawa.”

研究分野：在宅看護

キーワード：アクションリサーチ　緩和ケア　住民参加　地域ケア　看取り

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2010 年度から取り組んだ「アクションリサーチによる在宅緩和ケア拠点の形成とその活動評価」による研究から(研究代表者: 大金ひろみ、課題番号 22390449)、1) 素人の地域住民と保健医療福祉の専門職が、在宅緩和ケアや住み慣れた地域での看取りへの「思い」を共有できる可能性があること、2) 地域住民が専門職に新しい視野を与え、専門職のケアのあり方を再考するきっかけを作ることができること。3) 地域住民と専門職との協働により、両者にとって既存の制度にはない介護や看取りのための地域の情報やネットワークを再発見できることなどが学び(Learning)として導き出された。

これらのことから生と死を実感する機会となり、社会的な視点から看取りについて捉え直すことができ、ここでの学びが今後の構えや備えとなって、当事者になったときの安心感・ゆとりを生み、満足感や納得につながることが期待できる。また、在宅での緩和ケアや看取りは、その地の域特性を活かして地域住民と専門職とがともに取り組む必要のある課題であることも示唆されている。

２．研究の目的

本研究は住み慣れた場所における看取りをテーマに地域住民と保健医療福祉の専門職との協働による本音のディスカッションとこれにもとづく実践から、「看取りのケアの縁側づくり」を行うことを目的とした。ここで言う「看取りのケアの縁側」とは、ケアニーズの発生前から専門職と地域住民とが出会い、協働するコト/場を意味しており、本研究に先行する研究活動から見出されたコンセプトである。

３．研究の方法

アクションリサーチの手法を用いた。欧米のアクションリサーチでは、企業組織や教育現場を対象にした研究が多く、がんに関してはコミュニティでの情報活用をテーマとする当事者参加の協働型アクションリサーチ等が行われている。本研究で用いたアクションリサーチは、P.チェックランドが提唱するソフトシステム論(Soft System Method:以下 SSM)[1]を木村敏のアクチュアリティ論から再構築しており、個人の思いを集団の思いに変換させた「思いのモデル」から「アクションプラン」を作成し、実践と学習を繰り返していくという SSM ベースのアクションリサーチである [2]。ここでは、在宅緩和ケアを実証主義の理論的枠組み(リアリティ/モノ)ではなく、「アクチュアリティ/コト/思い」の視点から捉え直していく。

４．研究成果

研究を通して、以下の成果が得られた。

(1)　専門職と素人の地域住民が共有した「地域での看取り」に関するラーニング

専門職は専門性を提供する側、素人の地域住民は専門性を利用する側という立場から離れて交流する「場」が必要である。家の内と外をつなぐ縁側のように、異なるコミュニティに属する人々がコミュニティの内と外を往き来できる「場」として「縁側」というコンセプトを見いだした。

専門職と素人の地域住民との思いを共有するディスカッションを通して、訪問看護師の学びは、「普段から地域になじむ」ことで、「自分たちと地域の人々のあいだの「敷居」が下がると、家での看取りが実現できる」というものであった。素人の地域住民の学びは、「自分でも気づかなかった看取りへの自分の思いを客観視できた」こと、「サービスを受ける高齢者と家族にも大きな壁があると気づいた」こと、「コミュニケーションを図る余裕がない家族が「それならやれるかも」と気づける「縁側」のような空間が必要である」というものであった。

(2) 訪問看護師が「地域での看取り」の SSM ワークショップに参加することの意義

訪問看護師にとっての看取りは日常の出来事であると同時に、一人ひとり異なりこれまでのフレームワークが揺さぶられる体験でもあった。SSM ワークショップにおいて、看取りの経験とこれにもとづく実感や思いを素人の地域住民と共有することで、「自分のやってきたことは間違いない」、「これで大丈夫だ」という「思い」を持てていた。

また、訪問看護師には、ワークショップのなかで日頃の実践についての様々な気づきが生まれていた。それらの気づきが訪問看護の実践を通して自覚され、個別的な看取りにおける訪問看護師の実践知を蓄えるのにも役立っていると推察された。

これらの研究成果の一部は、第 18 回日本看護管理学会学術集会、The 11th Asia Pacific Hospice Conference にて発表した。

(3) ナラティブプローチにもとづく事例検討会を活用した看取りに関わる専門職育成

SSM ワークショップでのディスカッションを通して、異なるコミュニティに属する素人と交流し、学び合うことのできる看取りに関わる専門職には、自らが意図的に専門職と生活者の立場を往来できる高い実践力を備えている必要性が示唆された。このことから、看取りに関わる専門職を育成するパイロットスタディとして、ナラティブアプローチにもとづく多職種による事例検討会から専門職育成に必要な要素を取り出すことにした。

事例検討会が、SSM ワークショップにおいて有効であった日頃の実践から距離をおいたリフレ

クションの機会となるよう、高度看護実践能力を持つリエゾン精神看護師にコンサルテーションを依頼し、対象者との関わり方やコミュニケーションスキルについて助言を得た。事例検討会は9回開催された。参加者は、訪問看護師、介護支援専門員、介護士、社会福祉士、自治体職員、民政委員、警察署員等であり、このうちの112名がアンケート用紙に回答した。事例検討会に対する満足度8.1/10点、参加して良かった点は、コミュニケーションスキルについて学べた64.2%、ケアの方法について知ることができた56.8%、自分の実践を振り返ることができた67.9%であった。

看取りや困難と感じる事例を抱える専門職のニーズに、リエゾン精神看護師の精神力動論やナラティブアプローチの理論にもとづく援助技術への具体的な助言があり、このことが日頃の実践の振り返りも促すと考えられる。以上のことから、地域での看取りにかかわる専門職育成のプログラム（案）には、事例検討会を活用すること、リエゾン精神看護師のコンサルテーションを盛り込む必要性が示唆された。

これらの研究成果の一部は、The 12th Asia Pacific Hospice Conferenceにて発表した。

＜引用文献＞

1) Checkland, P. & Scholes, J.(1999). Soft systems methodology in action. Wiley.
2) 内山研一(2007). 現場の学としてのアクションリサーチ ソフトシステム方法論の日本的再構築. 白桃書房.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　3　件）

・鈴木聡、大金ひろみ、内山研一、丹内まゆみ、出口三奈子、インフォメーション・エクスチェンジ 「地域で看取るとはどういうことか？」：SSMベースのアクションリサーチからの学びのリフレクションの場、第18回日本看護管理学会学術集会、2014.8.29. 松山.

・Ogane H. : Changes in Non-Professionals' Feelings of Reality Regarding Caregiving Yielded Through Discussions with Specialists in Home Hospice Palliative Care, The 11th Asia Pacific Hospice Conference, 2015, Taipei Taiwan.

・Ogane H., Hasui T. Action Research on Creating "Engawa", a Boundaryless Place of Communication for Nursing Care: Case conferences for multi-disciplinary collaboration, 2017, Singapore.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：蓮井貴子

ローマ字氏名：HASUI Takako

所属研究機関名：東京医療保健大学

部局名：医療保健学部

職名：講師

研究者番号（8 桁）：50450002

(2)研究協力者

研究協力者氏名：内山　研一
ローマ字氏名：UCHIYAMA Enichi

研究協力者氏名：鈴木　聡
ローマ字氏名：SUZUKI Satoshi

研究協力者氏名：川名　典子
ローマ字氏名：KAWANA Noriko

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。